

研究テーマ

内服自己管理患者における内服手技・動作の分析調査
～薬を落とさずに内服するために～

病 院 名

医療法人社団健育会 ねりま健育会病院

演 者

しわく、ゆうすけ
○塩飽悠介(看護師)

概 要

【研究背景】

回復期リハビリテーション病棟では内服自己管理導入基準に従って内服自己管理の練習を行っている。しかし、患者が何らかの形で内服薬を床に落下させてしまう（以下、落下薬）インシデントが多発している現状がある。正確な内服を続けるためには内服薬の必要性の理解に加えて、内服薬を開ける、口の中まで入れる、飲み込むといった一連の動作が成立しなければならない。これらの問題点やデータを分析することで自己管理の精度を高めることが出来るのではと考え、新たな内服管理の要素を明らかにしたい。

【研究目的】

内服管理自立を目指す患者が自己管理中に「指示された薬を確実に内服出来る」ようにするため、内服動作に関連する評価項目を明らかにする。

【研究方法】

期間：2019年4月～2020年3月
内服自己管理中に落下薬をした患者、内服自己管理中に落下薬しなかった患者2群間の比較をt検定もしくは χ^2 検定を用いた。MMSEで認知機能、握力（左右kg）で力、上肢ROMで関節可動域、FIMで自立度、STEFで上肢機能を評価しデータ収集を実施。

【結果】

自己管理導入基準をMMSE23点以上としているため、FIMの認知面とともに有意差はなかった。落下薬なしの患者はFIM運動項目で下肢機能も回復し総合的な動作ができる人が多い。STEFについては上肢の大きな動きに有意差が出た。

【考察】

細かい薬をつまむ動作ではなく、手のひらに乗せて（手をひねる、薬を移す）、口元まで手を持っていき（肘を曲げる）飲み込むまでに手首を返すという一連の大きい動作が必要だと示唆された。落下薬の無い人がある人に比し、有意に移乗・移動の項目の得点が高く、上肢機能が高かった。

【結論】

内服薬を正確に飲むためには、下肢機能と手首、肘、腕などの上肢の動きが正確に薬を口元まで運ぶ動作に影響していることが示唆された。

【引用参考文献】

真栄里久美子他：内服自己管理患者における今後の課題，2019
増田愛梨他：内服自己管理の患者に対する看護師の服薬指導の実態，2018